

太平洋時代の創造的協力関係

昭和五十五年一月十七日、メルボルンでのフ
レーザー-豪州首相主催午餐会で行った演説。
環太平洋構想を初めて対外的に英語で表明

フレーザー首相閣下

ご在席の皆さま

このたび、私は貴国のご親切なお招きにより、八年ぶりに豪州の美しい風物に触れることができました。キャンベラにおいては、フレーザー首相閣下をはじめ、豪州首脳とのきわめて実り豊かな友好的な対話を交わす機会を、また本日、ここメルボルンにおいては、豪州指導者の皆さまを前にして、国民の皆さまにお話する機会を、与えられました。これは私の深く喜びとするところであります。

また、到着以来、私ども一行は、豪州国民の皆さまから心のこもった歓迎とおもてなしを受けました。この場をお借りして、深甚な感謝の意を表明いたす次第です。

フレーザー首相閣下

私は、本日のこの機会に、百年余前に始まり、とりわけ

この四半世紀ほどの間に目覚ましい発展を遂げた日豪関係が、一九八〇年代を迎え、さらに二十一世紀に向けて、いかにあるべきかについて、私見を述べたく存じます。

二日前、日本を発つとき、東京は、厳寒の冬でありました。豪州に着いたとき、キャンベラでは陽光のまばゆい真夏でした。私は、この季節の差とともに、いまさらのように、豪州と日本との大きな違いを感じざるを得ませんでした。わが国は、一億の人口が狭い国土にひしめいている島国であります。豪州は、一千四百万の国民がわが国の二十倍の面積の国土に住む豊かな自然に恵まれた大陸であります。両国は、人種、言語、文化、歴史的伝統も大きく異なっています。しかも、両国の間には、広大な大洋が横たわっています。

にも拘らず、この二つの国は今日互いになくはならぬ国となりました。すなわち過去二十年間に、年間の往復貿易総額は二十数倍という飛躍的な増大ぶりを示しました。鉱物資源、とくにわが国が輸入する石炭と鉄鉱石については、その半分近くが豪州からのものであり、食糧についてもわれわれは大きく豪州に依存しています。その結果、わが国は、今日、豪州の最大の貿易相手国となりました。

とくに、最近の石油危機によって、ウラン、石炭、天然

ガス等に恵まれた豪州は、いまや世界有数のエネルギー資源大国となりました。エネルギー資源の大部分を海外に依存するわが国としては、フレーザー首相はじめ豪州の首脳が、機会あるごとに、「豪州は今後も安定的なエネルギー供給国としての役割を果たしてゆきたい」と表明されていることに、非常な心強さを感じております。

私は、八年前に第一回の日豪閣僚委員会に外相として訪豪した際、両国間の貿易の急激な発展について、「このような急激な変化においては、往々にして摩擦や歪みが生じがちなものである」ことを懸念し、双方の努力が必要であることを申し述べました。幸いにして、双方の努力の結果、いくつかの障害を乗り越えて今日のことき成果に達し得たことを心から喜ぶものであります。

この背景には、両国の貿易構造が相互補完的な関係にあったことにあることは、多くの人の指摘するところであり、ます。が、同時に、私は、日豪両国が、ともに自由主義経済体制をとり、国民が平和と民主主義を愛する点で共通していたことも重要な要因であったと思うのであります。そしてまた両国は、科学技術の面でも、教育水準の面でも、ほぼ相等しく、また、共通の価値観を追求する点においても相通するものがあつたからだと考えます。

この会場にお集まりのすぐれた指導者の方々は、以上のような事実を十分ご承知のことと思ひます。しかし、率直に申すならば、残念ながら、多くの日本人にとつては、豪州はまだ遠い国であり、また豪州の国民の中にも、日本を未知の国とし、あるいは、過去の不幸な戦争の記憶をおもちの方も多いと承知してゐます。私は、この機会に、わが国が戦後、世界で唯一の戦争を放棄した憲法をもつ国であり、いかなる国際紛争の解決も武力によらないことを国是としており、そして国民のほとんどすべてがこの国是を堅持することを望んでいることを申し上げておきたいと思ひます。

国と国との友好関係は、物的基盤のみではなく、国民と国民との相互理解を土台にして、構築されねばなりません。この相互理解が行き届くならば、多少の経済上の利害対立は、必ず解決できるのであります。この観点から、日豪両国政府は、一九七四年に日豪文化協定を締結し、これに続いて日豪文化交流計画を実施しました。また、七五年には、豪側において豪日交流基金が設立され、七七年には日豪友好協力基本条約が結ばれたのであります。

私は、これらの積み重ねをふまえ、八十年代においてはさらに幅広い重層的な交流の一層の強化促進に努力し、良

き隣人としての関係のきずなを強めることに全力を注いでまいりたいと思います。

フレーザー首相閣下、私は、ここで、日豪両国関係の未来にとつて、本質的なかかわりを有するアジア太平洋地域における多角的な協力関係の展望について申し述べたく思います。一昨年、私は、総理就任の際に政治理念の一つとして、「環太平洋連帯構想」を提唱いたしました。

まず、私は、現代の国際社会を特徴づける最も主要な傾向を「相互依存の深まり」として捉えたいと思います。今日、われわれが住む地球は、共同体としていよいよその相互依存の度を高め、ますます敏感に反応し合うようになっています。この地球上に生起するどのような事件や問題も、またたく間に地球全体に波及し、地球全体を前提に考えなければ、その有効な反応が期待できなくなってきました。この傾向は政治、経済、社会の分野に止まらず、文化や国民心理の次元にまで深く浸透しております。

このような相互依存の深まりの中で、近年、環太平洋諸国間における友好と協力の関係は著しく前進しました。

今日、これらの地域には最もダイナミックな経済が営まれ、多彩な文化が花咲きつつあります。

しかも、これらの国々をへだててきた太平洋は、さまざま

まな交通通信手段の発達によって、安全で、自由で、効率的な交通路と変わったのであります。かくして、広大かつ多様な太平洋地域は、歴史上はじめて、一つの地域社会となり得る条件をもちました。

しかしながら、過去の地域的な協力の多くが、共通の言語、共通の文化、共通の伝統等の同質性を軸として、その絆を強めてきたことを想起するとき、多種多様な文化的、歴史的背景をもち、経済発展の段階も異なるこれら太平洋諸国の間に、果たして、新しい協力関係、それに基づく新しい文明が創造され得るかと問われるかもしれません。

私は、このような困難な課題を解決しつる手がかりは、次のとおりであると考えます。すなわち、それは、各国の文化的独自性と政治的自主性を理解し、信頼しつ行われる地域協力であり、かつ、地球社会時代にふさわしい開かれた地域協力であると考えます。また、環太平洋諸国の連帯は、そのような意味から言っても、決して排他的なブロックの形成を目指すものではありません。太平洋諸国のためばかりでなく、人類社会全体の福祉と繁栄を最大限に引き出すことこそ、その最終的な願いなのであります。

私は、このような構想を胸に抱きつつ、関係諸国の首脳と接触してまいりました。

フレーザー首相閣下とは、昨年五月マニラにおいて、また今回の臺灣訪問において、これらの問題につき意見を交換しましたが、首相閣下は、きわめて深い理解を示され、私は、意を強くしたのであります。

現実に、日臺関係は、もはやバイラテラルな関係のみではなく、アジア・太平洋地域という観点からも論じられるようになっております。私は、このたびの臺灣訪問によって、日臺両国の友好促進による両国の利益が、環太平洋諸国の利益にかなうものとなることを強く確信するようになりました。

さらに私は、日臺両国が、太平洋地域の連帯について、とりわけ重要な役割を果たし得るのではないかと考えております。

すなわち、第一に、日本人は、長い間東洋の偉大な精神文化の影響の下に独自の創造性を培い、その力をもって、明治以後百年余の間に、西洋の文明を十分に消化吸収することに成功した民族であります。

また一方、臺灣の国民は、西欧にその人種的、文化的起源を有しつつ、アジア・太平洋地域の新大陸に作られ、そしてアジア・太平洋という新しい環境に対する高い感受性と理解力と創造的な適応力を示してきた民族であります。

さらに、臺灣は、百力国以上の国をその母国とする人々によつて成り立っていると伺っております。このような多様な文化と、人種グループの存在が、臺灣社会における対立や緊張につながることなく、むしろ多様の中の統一を維持し、豊かでダイナミックな臺灣独自の文化創造への推進力となつてゐることは、刮目すべき事実であります。

わが国も臺灣も、国民のたくましい活力によつて、歴史的に見れば、ごく短期間に、この偉業をなしとげました。しかも、両国は、太平洋圏の南と北の枢要な地点にあります。このような両国の特性にかんがみると、日臺両国は新しい太平洋文明の創造の重要な担い手となるべき国であり、その両国の友好の深まりは、必ず太平洋地域の連帯による安定と平和と発展と充実を促進させるものと信じてやみません。

以上申し述べたことは、一言で言うならば、『太平洋時代の創造的協力関係』の構築とも申すべく、その実現は一つの世界的実験といつても過言ではないと考えます。

フレーザー首相閣下、並びに、臺灣の国民の皆さま、われわれに課されたこの課題に、手をたずさえて挑戦しようではありませんか。もし、ご同意いただけるならば、私の臺灣訪問の目的は十二分に果たされたと考えます。

本日、豪州への公式訪問を終えるにあたり、この美しくかつ由緒ある古都メルボルンを訪れることができましたことは、私にとって無上の喜びであります。

メルボルンについては、一九五六年に当地で開催されたオリンピックを通じ、わが国国民にもあまねく知られております。また、いまからちょうど一世紀前の一八八一年に、この地で開催された万国博覧会にわが国が参加いたしましたことは、初期の時代における日豪関係の一里塚として想起されるところであります。本年、再び、当地で、この一世紀を記念する国際博覧会が開催される予定であり、わが国も参加することを決定いたしております。私は、この記念すべき年に、日豪関係史上重要な足跡を残したこの地を訪れ、この都市の殿堂たるナショナル・ギャラリーにおいてお話する機会を与えられ、まことに光栄に存じております。

数日後、私は、再び、あの広大な太平洋の上空を飛んで、日本へと帰ることになります。この大洋が、文字通り、「平和の海」として、諸国民を平和と調和の中に結びつける紐帯となることを願って、私の講演を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。